ヒル魔も人間

紅瑠実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒル魔も人間

【Ｎコード】
Ｎ６５３４Ｆ

【作者名】
紅瑠実

【あらすじ】
まもりが事故に…それを助けるヒル魔意外な展開に…

（前書き）

初めて書いた小説なので変な部分や間違っている所があると思いますが大目に見てやってください

今日は今までで初めてになるアメフト部の休みの日。理由は私とヒル魔くんのデート。私達だけの理由で休みにしちゃっていいのかなぁ？今日は〇〇公園の電信柱のよこで待ち合わせ。私は嬉しすぎて３０分も前から待っていた。そんなこと考えているうちにもう５分前。

今もうすでに糞マネはもう見えている。自分で言うのもなんだがけっこう視力はいいほうだ。糞マネまであと５００ｍと言う所だろう。俺は走って行く事にした。

ハァッハァッ。

少し息を整えて行こう。あと数ｍというところの信号で引っ掛かった。（まもりの反対側の信号で引っ掛かった状態

俺はまもりを眺めていた。すると公園からサッカーボールが転げて来た。

俺は油断していた。サッカーボールを追いかけて来た男の子が５歳位の子が車の前に飛出した。その瞬間まもりは男の子を守る為男の子を抱えて車に背を向けて目をつぶった。

私が早くこの男の子を止めていればヒル魔くんと久しぶりにデート

行けたのに…
私死ぬのかな？

ヒル魔はすぐかばんと武器全てほりなげてまもり達のもとへ走った。アメフト部で鍛えた足四十ヤード走５秒１…だが少しスピードが足りない気がする
「糞チビ位はやきゃよかった
ヒル魔は車がまもり達まであと１ｍ位の場所に来た瞬間をねらってヒル魔はジャンプをしてまもりと男の子を抱え反対側のガードレールにあたる瞬間にまもりと男の子を抱え込んだ。　バキツボキツドンガラガッシャンと派手な音をたてて３人はガードレールにぶつかった。正確に言うとヒル魔が２人を守っていたのでヒル魔だけが思いっきりガードレールにぶつかった。まもりはすぐに起き上がった。
「大丈夫？」男の子は無事だった。まもりはすぐにヒル魔を見た。
「っ！！」
「ヒル魔くん大丈夫？」ヒル魔はガードレールにまもりと男の子と自分の体重がかかったぶつかった為血まみれだった。男の子のお母さんがすぐ駆け寄ってきて救急車を呼んでくれた。
「うっヒル魔くんゴメンネ」まもりが付添人として救急車に乗った。救急車のなかで医師に聞かれた。
「助かる確率はほとんど無いでしょう」
このまま苦しい思いをしないように安楽死をさせてあげるかほとんど確率のない手術に賭けるかあなた次第です。そんなの手術に決ま

ってるわと言った。まもりはヒル魔が手術室に入ってからすぐにアメフト部全員に連絡した。ヒル魔が手術室に入ってから３０分たつころにはアメフト部全員集まっていた。
「みんな集まってくれてありがとう」
「それでヒル魔はまだ手術室か？」
小さいうなずいた。まもりはデビルバッツ全員にヒル魔くんがどうして怪我をしたかを話た。話した後３０分近く沈黙が続いた。沈黙を破ったのは武蔵だった。
「お前らもう帰れ」
「どうしてですか？」
「あいつは弱っている所を見せるのを嫌がるからだ残っていいのは俺と姉崎だけだ。だが後のみんなは一緒にいてくれ。あいつがめを覚ましたら呼んでやる」
「じゃあみんなで練習してよーよ」
みんなが帰ってから3時間がたつと手術室からヒル魔と医師が出て来た。
「ヒル魔くんっ」すぐに駆け寄った。ヒル魔は寝ている。
「先生容態は？」
「いやこの子は気力がありますね。絶対に叶えたい夢でもあるのですか？もし夢を死んでも叶えるという気持ちがなければ今ここにはいないでしょうそれとこの子の親に連絡してください。親が来るまで帰せないんで。」

ヒル魔くんの親ってどこにいるの？私知らない！
「武蔵くんヒル魔くんの親って知ってる？」
「いや知らねぇ。ヒル魔が起きたら聞くしかねぇな」

そうだよね！ヒル魔くん起きたら聞くしかないよね。ヒル魔くん大丈夫かな？

その1時間後
「うっ！頭いてぇ」
「ヒル魔くんの親どこにいるの？」
「事故にあって手術後起きた人に言う事か？」ヒル魔が寝ている間に医師に言われた事をヒル魔に話した。「俺に親はいねぇ。俺が3歳の時に死んだ。」

えっ嘘でしょ。でもあの顔は嘘をついてる顔じゃない。

「ゴメン知らなかった。」
「いや別にいい」
「じゃあヒル魔どうやって帰るんだ？」

どうしよう早く帰らないと練習出来ないしあっそうだ私のお母さんにヒル魔くんのお母さんのふりしてもらおうかな？でもお母さん手伝ってくれるかな？本当のお母さんのふりするには妖一って読んでもらはないと。駄目よね…
本当どうしよ！
コンコン
ドアを叩く音が聞こえた。
「まもり～ヒル魔くんの様子どう？」
「入ってください。」
ヒル魔が敬語が！？
「あらヒル魔くん起きてたのね。」
「はい」
えぇ～ヒル魔くんがはい！？
「まもりを助けてくれてありがとうね。」
「いえいえ。僕は無意識のうちに足が動いていまして」アリエナイ
ヒル魔くんが僕！？駄目よね…
本当どうしよ！

武蔵くんはさっき帰ったし。
まもりは考え込んでいた。
「…もり。」
「まもり！」
ヒル魔くんが呼んでいた。
「なに？」
「話ついた帰るぞ。」
ヒル魔くん親がいないと帰れないの忘れてる！？
「まもりのお母さんがふりしてれる。」
「ならよかった。」
ヒル魔は退院した。
「まもりはヒル魔くんの家知ってる？」
「送って行ってあげないと駄目でしょ！」それもそうね。
ヒル魔の家に着いてまもりとヒル魔とまもりのお母さんお父さんはヒル魔の家にいたヒル魔は全員の分コーヒーをいれた。
そして
「まもりちょっと席はずしてくれるかしら？」まもりはお母さんに言われるままに他の部屋へ行った。
話があまり聞こえない。
「…魔く…は…り…ら」
「も…です」
「本当…家にあいさつ…ど」
まもりのお母さんがまもりのいる部屋に来て今日はヒル魔くんの家に泊めてもらいなさい。ご飯作ってあげてね。と言って帰えろうとして足を止めてまもりの耳元で囁いた。
「ヒル魔くんいい子ね。」ふふっとそれだけいうと帰ってしまった。
まもりはおそるおそる聞いた
「ママとなに話たの？」
「知りたいか？」
まもりはコクコクとうなずいた。

「まもりを嫁にください
っていったらオッケーみたいな感じで幸せにしてやってくれって」
とヒル魔が言うと、まもりはヒル魔の胸に抱き付いた。そしてまも
りはゆっくり口を開いて
「ヒル魔くんの心臓の音早い」
「たりめぇだ！親に言う時緊張しねぇやつはいねぇ！」
「ヒル魔くんも人間の感情持ってるんだ」意外そうにいった
その後お互いを確認するように深い深いキスをした。

終わり

あとがき

初めての作品です。
駄作ですみません
こんな駄作を最後まで読んで
くださった方ありがとう
ございます。
感想いただけると嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6534f/

ヒル魔も人間

2010年10月11日05時41分発行